

北朝鮮帰国事業を教えるなかで——解説に代えて

高柳 俊男

△なぜ「あんな国」に？▽

大学で、「在日朝鮮人の歴史」や「朝鮮民族のティアスポラ（離散）」という授業を担当しています。戦後、在日朝鮮人（総称）の経てきた歴史のなかで大きな位置を占める、一九五九年からの北朝鮮帰国事業についても当然触れることとなりますが、当時の時代状況やそれがもっている重みをいまの学生たちに理解させることは、そう容易ではありません。

というのは近年、北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）といえば、いい話題がほとんど伝えられないからです。核開発、ミサイル発射、拉致、飢餓、脱北、紙幣偽造、麻薬の密売……悪い素材には事欠かない一方で、憧れや健全な関心を抱かせるような、明るい話はほとんど耳にしません。これは日本のメディアの伝え方にも問題があるでしょうが、より根本的にはやはりあの国自体が、政治的・経済的に極度に病んでいることの反映と言えましょう。

現在、一般的に流通しているそうした北朝鮮イメージからすると、日本に住んでいた当時の朝鮮人が、なぜ住み慣れた日本を離れ、よりによって北朝鮮に渡って行ったのか、きわめてわかりにくくなっています。授業のなかで、その数が合計九万二〇〇〇人以上（日本人の配偶者・子どもを含む）の多数に達したこと、しかもそのほとんどがもと朝鮮半島の南部、すなわち現在の韓国の地を故郷とする人々であったことなどを伝えると、学生たちはいつそう困惑した表情になります。

授業のテキスト候補となるような既刊の在日朝鮮人史の通史などでも、北朝鮮帰国事業について十分に説明されているとは言えません。言及がないか、せいぜい歴史の一コマとして、簡単に触れられている程度のものが一般的です。本当は、一九七〇年代以降唱えられる「日本社会への定住」や「日本人との共生」とは、「帰国すべき理想の土地などない」という認識といわば表裏の関係であり、北朝鮮帰国事業の盛衰は戦後の在日朝鮮人の歩みにとって、決定的に重要な要素だったはずなのですが……。

そうしたなかで、通史類としては例外的に多くの分量を割いて記述しているのが、故・梁泰昊氏の『在日韓国・朝鮮人読本——リラックスした関係を求めて』（緑風出版、一九九六年）という著書です。この本はQ&A形式を採用し、二六の設問に答える形を通して、在日朝鮮人の歴史と現状がたどれるように構成されていますが、その第十四番目の問いに「北朝鮮への帰国運動とはどういうものですか？」を掲げ、八頁を費やして詳述しています。ここでは、帰国事業について基本的な説明を加え、データを提示したうえで、帰国の理由として、①在日朝鮮人が日本での生活に絶望したと（就職差別など）、②北朝鮮が労働力不足を補おうとしたこと、③日本側が在日朝鮮人がいなくなる

ことを望んだこと、の三点を挙げ、問題を多角的にみようとしています。

授業ではまた、北朝鮮帰国事業が始まった当初の雰囲気伝える映画として、望月優子監督の『海を渡る友情』（東映教育映画、一九六〇年、脚本は朝鮮を扱った当時の映画の多くを手がけた片岡薫）をよく使っています。帰国事業に触れた映画というと、吉永小百合が主演した『キューポラのある街』（日活、一九六二年）を思い出す向きもあるでしょうが、この『海を渡る友情』は、北朝鮮帰国事業を主題に据えてつくられた唯一の劇映画です。

朝鮮人の父親（加藤嘉）と日本人の母親（水戸光子）をもつ小学生の一人息子が主人公ですが、母親の籍に入って日本名で暮らす彼は、まだ自らの出自を知りません。ところが帰国運動の高まりのなかで、父親のもとにも組織の知人が訪ねてきて、熱心に帰国を勧めます。初めは見知らぬ土地での生活や、とくに日本人の妻子のことを心配して逡巡していた父親ですが、ある晩、民族学校で催された映画会で、第一船で帰った人々の歓迎ぶりや活気あふれる新生活を写した記録フィルムを観て、気持ちが一気に帰国のほうへ傾きます。夫婦が「帰る、帰らない」で言い争っているところに帰宅した息子は、父親の口から初めて自らの出生の「秘密」を知らされ、当惑と自暴自棄に陥ります。彼自身、クラスの悪童たちといっしょになって、よく同級生の朝鮮人をいじめていたからです。しかし、級友や先生たちの温かい励ましのおかげで彼は元氣を取り戻し、やがて朝鮮学校への転校を経て、晴れて一家で北朝鮮に帰国していきます。

帰国事業のなかで生まれた親子間と夫婦間の葛藤が、最後には見事に解消されるハッピーエンド

の物語ですが、父親が帰国を決意する背景に、朝鮮人だとわかって職場を何度もクビになった苦い差別体験や、息子を妻の籍に入れてその出自を隠し通してきた偽りの生活からの脱出願望があることが、心に重たく残ります（この映画に関しては、文末に掲げた拙稿でより詳しく分析していますので、ぜひご覧ください）。

△梁泰昊氏の遺志を継ぐ▽

こうした教材の助けで、当時の人々がどうして日本を離れて北朝鮮に渡って行ったのか、その理由や当時の時代状況がある程度、追体験できます。北朝鮮政府やその「在日」組織である朝鮮総連にとつては、労働力不足の解消のほかに、自分たちの国や体制の優越性を誇示する絶好の機会だったでしょうし、逆に韓国やその配下の民団サイドは、反共の立場から「北送」を阻止する運動に血眼になりました。日本政府に、生活保護受給者や「不満分子」の多い朝鮮人を「厄介払い」する意図があったのは確かですが、一方日本の社会のなかには人道的な立場や思想的な理由で、帰国事業に善意で協力した人たちがいたのも事実です。帰国していった朝鮮人たちが、その記念とお礼として地元住民に送った記念碑や記念の品物（記念樹、時計台など）が、いまでも日本の全国各地にたくさん残されているのは、あの時代の麗しき日朝連帯の証です。何が当時の在日朝鮮人に帰国を決断するに至らせたのか、本人たちの心情や葛藤、その背景にある関係各国や諸団体の思惑を分析するのは、北朝鮮帰国事業研究の大事な点です。

同時に、北朝鮮帰国事業は、新潟港から清津港への渡航をもって終了したわけではありません。映画『海を渡る友情』が、品川から新潟に向けて帰還専用列車が出発し、多数のハトが大空に舞い立つ画面で終わっていたように、帰国事業を推進し、それに協力した当時の人々は、差別の多い日本から、人民が大切にされる社会主義の国に行くことは「正しい」ことであり、帰国者たちが「祖国」において平和で平等に扱われ、一人一人の可能性を最大限に発揮できることを信じて疑いませんでした。宣伝のなかで、北朝鮮を「地上の楽園」視する表現も現れました。

しかし、現実が理想と異なるという知らせは、帰国事業開始の直後から届けられます。「あれを送れ、これを送れ」といった生活必需品の無心から始まり、個人の自由の範囲や政治的環境が日本とは段違いに厳しいことも伝えられます。つまり帰国者たちは、政治・社会体制も、経済レベルも、場合によっては言語や文化や民度も異なる、いわば「異文化」に放り込まれたわけです。この人々の帰国後の適応や不適応に対してもまっとうな関心が注がれなくてははいけませんし、その安否や消息に関する情報が十分でなく、日本への里帰りや往来が基本的に閉ざされていることが問題視されなければなりません。つまり現在の実践的課題としては、帰国事業の「その後」が、より重要な課題と言えます。

ところが、前述した既刊の在日朝鮮人史の通史類では、帰国者の「その後」にはまず触れられていません。また、コンパクトで便利な『岩波小辞典 現代韓国・朝鮮』（二〇〇二年）でも、当初予定された「帰国運動」の項目が最終的に「帰還協定」に変更・縮小されたこともあり、帰国事業の

「その後」には一切の言及を避けています。

ここでもやはり、梁泰昊氏の『在日韓国・朝鮮人読本』は異色と言えましょう。さきに触れた部分に続けて、同書では、帰国さえすれば衣食住に何の心配もないと言われていたが、「実情は耐乏の日々」であり、「新たな差別と生活苦」であったと明確に述べています。また、山の中の「統制区域」（政治犯を隔離収容する場所）に送られるなどして、死亡ないし行方不明になった二人の個人の例を、名前を挙げて記しています。帰国後にもたらされたこうした事態は、帰国者自身にとっての悲劇であるばかりか、仕送りを続けざるをえない「在日」の親族にとってもつらいものであり、「まるで人質を取られているような状態」だ、と表現されています。

そのうえで梁泰昊氏は、「地上の楽園」といった北朝鮮イメージは、日本への失望と祖国への期待がない混ぜになって生まれた「幻想」だったと断定し、次のような意志の込められた主張でこの章を締めくくっています。

「帰国者は日本及び在日韓国・朝鮮人と深い関わりを持った人です。家族として日本海を渡った日本人も含めて、彼らの人権を守るために、彼らがその後どうしているのか、目をそらすことはできません。」

ちなみに、この『在日韓国・朝鮮人読本』は、これまで触れた部分だけからもうかがえるように、日本の法や社会の問題点を指摘すると同時に、自分たちの側が抱える弱点や偏向にも目を向け、「自省」や「自己責任」を強調する姿勢が全編を貫いています。著者の公平で■とした態度は、一方

的な告発や糾弾調のものより、かえって読む人の心を打ち、襟を正させます。

梁泰昊氏は本書刊行の二年後に病没されたので、本書はサブタイトルにある「リラックスした関係」、つまり在日朝鮮人への差別や偏見がなく、また「在日」だからといって妙に肩肘を張る必要もない、対等で自然な関係を求め続けた著者の遺言の書であり、次代の「在日」や日本人に向けた前向きのメッセージとも言えるでしょう。帰国事業のほかにも、「祖国」や「民族」にもたれかからない「在日」のアイデンティティのあり方や、「在日」と日本社会の今後の展望などについても、永年の地域活動（尼崎）の實踐に裏打ちされた柔軟で斬新な見解が示されていて、細かな記述のミスを超えて本書を類書なき貴重な存在にしています。それにしても、北朝鮮帰国事業と帰国者の「その後」に関心を抱き続けた梁泰昊氏や金英達氏のような方々が、病氣や事故により早くに他界されたのは、返す返すも残念なことです。

△無残に逝った人々の思いを代弁して▽

梁泰昊氏のこうしたテキストで学んできた学生たちにとっては、韓錫圭氏による本書は、決して荒唐無稽な作り話ではなく、梁泰昊氏の書き残した内容につながり、それをさらに豊富な実例で補充するものとして、すんなりと受け入れられるに違いありません。もちろんそれは、楽しく気楽に読めるという意味ではなく、重たく衝撃を伴う内容であることは言うまでもありません。

本書には、韓錫圭氏の体験や見聞に基づく八つのお話が、「実話小説」という形にまとめられている。いずれも、ぬるま湯につかったようないまの日本の生活からは想像できない話で、その事実の重みに圧倒されます。

喜び勇んで「祖国」の大地に第一歩を印した帰国者たちでしたが、北朝鮮の寒さと貧しさは日本での想像以上であり、早くも前途に暗雲が立ちこめます。厳しい自然環境や耐乏生活だけならまだしも、異なる体制の国から来た帰国者への社会の無理解、さらには社会主義社会に害毒を流す恐れのある者としての日常的な監視・統制は、日本での差別や偏見からの解放や祖国の社会主義建設への貢献、そしてよりよき自己実現を期待しての渡航だっただけに、本人たちに「そんなはずではなかった」という反問と後悔の念を抱かせます。とくに自分から率先して帰国しただけでなく、逡巡する家族・親族を説得して連れ帰った人々にとっては、自分の判断ミスにより多くの他人を巻き添えにする結果となり、その取り返しのつかない行為への申し訳なき苛まれ続けます。ここには、宣伝で聞いた社会主義社会のイメージとは裏腹の官僚主義や無法、目に余る役人の不正、人々の労働意欲のなさ、そして何よりも帰国者への謂われなき過酷な処遇のなかで、期待を裏切られ、人生を踏みにじられた個々人の無念の思いが、その人々に寄り添う形で描かれています。

帰国者のことを考える際、よく事情がわからないだけに、ともすると九万三〇〇〇人という大きな数値のみで考えてしまいがちですが、その一人一人に帰国に至る動機があり、帰国後の酷薄な人生を強い意志と生活の知恵、そして帰国者同士の助け合いで生き延び、あるいはこころざし半ばにして倒れた人生のドラマがあるという事実、あらためて思いいたします。

その個人としてのかけがえのない人生を描いたのが、おそらくはここに書かれた人々以上に波瀾万丈の生き延びてきたと思われる著者でしょう。本書を読んで何よりも胸に迫ったのは、脱北に成功し日本に舞い戻って来られた者として、帰国者たちが北朝鮮でどう生き、どう死んで(殺されて)いったのか、その姿や思いを日本社会に、そして広く世界に伝えることを自己の使命とする著者のひたむきな姿でした。

筆者はそう受け止めたのですが、もつとも読者のなかには、「ここに書かれたことはどこまで事実か?」と、疑問を差し挟む人がいるかもしれません。あとで触れる朝鮮問題をめぐる「悪しき図式」から抜け出せない日本においては、ともすれば進歩的・良心的といわれる日本人であればあるほど、こうした本は北朝鮮を貶める「悪宣伝」であり、こうした「北朝鮮バッシング」に自分は乗らない、という姿勢を強くもっている場合があります。

冷戦体制が崩壊したとはいえ、朝鮮問題をめぐる伝統的な図式がまだまだ根強い日本では、その姿勢を崩すのは容易ではありませんが、ここでは疑問を解くカギの一つが、帰国事業開始直後の朝鮮総連関連出版物にあることを指摘しておくことにしましょう。それは、『また逢う日には』(一九六一年、理論社)という手記で、べつに組織内部の秘密文書ではなく、日本の出版社から公刊された本です。

△帰国少年の心情を綴った手紙▽

帰国事業開始から二年後に出されたこの『また逢う日には』は、副題を「朝鮮学生の手記」としているように、北朝鮮帰国事業によって帰った子どもたちが、現地から家族・親族、かつての民族学校の級友や恩師などに宛てた手紙を多数収録しています(帰国しなかった生徒のものも含みます)。

十条にある東京朝鮮中高級学校の当時の校長、南日龍の編で、彼の手になる「はじめに」では、本書が学校創立十五周年の記念出版物であることや、作文や手紙を集める作業を中心的に担ったのが同校の安宇植先生であることが明らかにされています。

本書には、草創期の在日朝鮮人の民族教育を描いた貴重な記録映画、「朝鮮の子」(一九五五年)のなかで使われた姜敏子さんの作文「高砂のおばさん」(原載は『歴史学研究』一九五三年六月、別冊特集「朝鮮史の諸問題」が再録されていますが、同映画の事実調べをし、姜畢生さん(かつての姜敏子さん)にお会いするため関西にまで出かけたことのある筆者としては、興味深い事実です。

また、帰国事業の開始を待ちきれず、一九五八年十一月、北海道の根室から小船で瑠瑠瑠水道に漕ぎだし、ソ連(北方領土)を目指して失敗した朝高生の手記や取材記事も数編含まれていますが、当時を象徴するこの出来事は、たとえば大江健三郎の小説「叫び声」(講談社、一九六三年、初出は『群像』一九六二年十月号)のなかでも素材として使われました。

そうしたトピックス的な興味もありますが、本書は全体として帰国事業開始前後の十代の若い日朝鮮人たちの息吹や熱気を伝え、とくに帰国学生からの手記では、帰国者に対する国や政府の温

かい配慮に感謝し、祖国での新生活への期待や明るい未来が多く語られています。まさに南日龍校長が「はじめに」で書いているように、朝・日赤十字間の帰国協定締結は、在日朝鮮人にとって「新しい人生の出発ともいえるべき歴史的なできごと」であり、「日本における過去数十年の民族的な差別と生活苦を清算し、あたたかい母なる祖国の胸に抱かれて幸せな生活をいとむ日のはじまりを意味する」といったトーンが、全編の基調をなしています。

そのなかで、だいぶおもむきを異にするのが、巻末の第四章に一挙収録されている韓正吉君の手紙です。最大の分量（全三四頁）が割かれている点でも、本全体と同じ「また逢う日には」が章の表題となっている点でも、扱いは決して小さくありません。

ここでは、単身帰国した高校生の韓正吉君が、きょうだいや両親に宛てた多数の手紙が時間軸に沿って配列されていますが、生の声はかなり正直に綴られており、興味深いものです。もちろん、母親宛ての手紙では、当地に着いた当初はつらく、何かにつけ東京のことをすぐ思い出したし、いまでも日本のラジオ放送を毎日聞いて、帰国者同士で日本のことばかり話題にしているとしながらも、「ぼくは元気ですから安心してください」と健気にも書いています。

しかし、弟への手紙になると、調子が変わり、「俺なんぞもう、まいにち学校へゆくのがいやでいやでたまらないよ」と言い、次のように続けています。

「俺たち（朝高からの帰国者——引用者注）の話といえば、いつでもきままっているんだ。脱走の話

だとか、日本にいる自分の家族のことについてな。楽しいぜその時がいちばん。自分が日本からもつてきたお菓子やら、かれらが送ってもらったカンヅメなんかを食べながら、お茶を飲み飲み。正直に言つて、俺な、朝鮮にきて以来、みんなと同じようにやせたぜ。また色もまっ黒にやけたしな。なにしろ、時計のバンドをひとつせばめなければならぬにさ。こんなこと母ちゃんにはいいうんじやないぞ、心配するからな。」

そのうえで、「アボチ（お父さん）にいいうんじやないぞ」と釘を刺しながら、恋しくてたまらない日本の新聞や雑誌を送つてくれるよう、弟に頼んでいます。

時間が経つにつれ、自分からこれだけ手紙を出しているのに、また「手紙の内容だって、別にこれといってそれほど当局側の不利になるようなことは書かなかつたはず」なのに、日本に残る家族から返事が来ないことに苛立ち、疑念を深めていきます。また送つてほしい品物の内容も、『高校時代』『大学コース』『朝日ジャーナル』などの雑誌のほかに、お菓子（腹のふくれないガムやドロップは不要）や弁当のおかずにするカンヅメ類、そして自転車のカギなどへと増えています。最後の自転車のカギは、盗難防止用なのでしょう。ここでも「オモニにはこの、物を送つてくれという部分は、なるべく話さないでくれ」と付け加えるのを忘れてはいません。

皮肉をまじえた書き方も、徐々に多くなっています。たとえば、弟には「朝高には——引用者注）学校警備というのはないだろう。ところが俺なんぞ、木銃をもって、夜の警備にたつんだぜ。ど

うだ、うらやましいだろう！ 馬鹿、うらやましいだなんていう馬鹿があるか！ 俺がこんなことをいうからって、あまり単純になりすぎるなよ」といった調子です。姉に対しても、「姉ちゃん、ほんとうに、もう姉さんたちは完全な日本人だぜ。こうして朝鮮にきてみてごらん。よくわかるよ。ぼくだって今、もう日本のことが、家族のことがどんなになつかしいことか」と書いています。

日本への望郷の思い、そしてその懐かしい地に住む家族からの手紙が一通も届かない不満は、一週間におよぶ援農（田植えの手伝い）を終えて宿舎に戻って来ても状況に変化がないことを知ったときに、一気に爆発します。

「今の自分は、どうにもならないやしきである。いかにもかれらのやり口はきたないじゃないか。そりゃ、そうしなければならぬというその必要性はわかるが、いくらなんでもそこまですなくともいいんじゃないか。せめて、せめて親と子がやりとりする手紙じゃないか。いくらきさまらが正しかろうと、やり方が正かくであろうと、それじゃあんまりだ。いくらいまの情勢がきんちようしているからといって。ぼくは日本にいるころ、人道主義というこのことばをもって、あのころの『アレ』にあわせて闘争したこともあるが、今さらくやまれてならない。だいいち、そこやここで、アボヂたちのおっしゃるその人道主義というのは、いったいなんのための人道主義なんですか？ ふん、こっちの奴らときたら、人道主義というそのことばの意味もわからないくせに、あるときにはイヤに大きな口をきいたじゃないか。……笑わせるな、

まるで……ハハハハ。」

この韓正吉君の場合は、まだ年端のいかなない高校生であり、家族をみな日本に残しての単身帰国であった点は考慮する必要があるかもしれません。また、こうして本に収録されたということは、当初は届かないと思われる彼の多数の手紙も、香港などを經由する当時の郵便事情から意外な日数がかかったとはいえ、最終的には関係者の手元に届いたということなのでしょう。

しかし、ここで韓正吉君が書いた当時の北朝鮮社会の問題点や不満は、決して彼一人が感じたものではなく、多くの住民、とくに民主主義社会を知る日本からの帰国者の大半が、身をもって感じた切実な思いだったと言えます。韓正吉君がその後どうなったか、手元に情報がありませんが、筆者には当時の韓正吉君が、本書で韓錫圭氏が綴った話の主人公たちにそのままつながっていくような気がしてなりません。

それにしても、これほどまでに率直な不平を書き綴った帰国者の手紙が、朝鮮学校編の出版物にそのまま載って出版されているのは、その後の目からするとときわめて驚きです。たとえば朝鮮総連は、帰国事業開始三〇周年をむかえた一九八九年に、記念のパンフレットを日・朝両語で出していますが、そのタイトルは『祖国の懐に抱かれて』（日本語版）、『母なる祖国の懐に抱かれて』（朝鮮語版）であり、内容も帰国者が国の主人になり、各分野で才能を発揮しながら、いかに豊かで幸せに暮らしているかに終始しています。問題点には触れず、成果ばかりを特筆するこうしたのちの姿勢と

比べると、対比が鮮やかです。

その点について『また逢う日には』では、巻末の「解説」で、「もちろん個々の学生たちにとっては、祖国での生活に慣れないため、あるいはその現実に対する理解の不足のため、不平も、苦勞もあることはそれぞれの手紙が示している通りで、それはとりわけ韓正吉君の手紙にいちじるしく現われているといえましょう。にもかかわらず、これらの手紙はおしなべて、現在の不満や苦勞が近い将来には解消されることを前提とし、それを確信した上でのものであることに注目すべきだと思います」と記しています。希望的観測がだいぶ混じっているようです。

さらに筆者が一九八九年八月、当事者に聞き書きしたところでは、「こうした弱点をもったものも、やがては克服されていくはずで、子どもたちの声をありのままに載せようと思って収録したが、そのために組織から批判された」（要旨）とのことでした。自由な発想を封じ込めるそうした批判が、心ある在日朝鮮人を総連組織から離れさせ、また日本の市民団体からも距離を置かれる結果を招いているのでしょうか。

へあらためて日本人にとっての朝鮮問題とは？

紙数も尽きました。最後に考えていることを大急ぎで書いて、この小文のまとめとしたいと思います。

この夏、前から読みたいと思っていた児童文学書『ぼくらの夏——民族を結ぶ物語』（小峰書店「現

代日本の童話」11、一九七四年）を入手して、読んでみました。この本は児童文学には珍しく、異民族との争いやふれあいを描いた短編ばかりを収めたアンソロジーです。全八篇のなかで、実に三篇までが朝鮮関連のものですが、「解説」を担当した古田足日によれば、その理由は一九一〇年から一九四五年まで、日本が朝鮮を植民地として支配した歴史があるからです、そのなかで日本人は支配者として朝鮮に行き、逆に朝鮮人は労働者として日本にやって来たり、連れて来られたりしました。「日本人と、ちがう民族との接触は、このように朝鮮人との接触が一番多く、深いので、しぜん、この本の中でも、数が多くなりました」とのことです。さらにこの三篇にうちの二編が、帰国事業にまつわる作品です（残り一つは、齋藤尚子の「金貞基」）。

313 北朝鮮帰国事業を教えるなかで

杉みき子の「新潟港のある日」は、一九六二年のある日の新潟埠頭が舞台です、主人公には小学校に通っていた戦前の時代、教室の花瓶を傷つけたのは自分なのに、黙っているうちに朝鮮人の「大山さん」の仕業となってしまう出来事がありました。その負い目から、帰国船が入港するたびに新潟港に立ち続けて「大山さん」を見送ろうとする、ある日本人の体験と心情が描かれています。遠藤豊吉の「海鳴りをこえて」は一九五九年、帰国第一船で新潟港を離れる金永昌少年の胸にある、友人高松久雄との思い出の記です。枝川町の朝鮮人集住地域に住んで新聞配達をする金と、牛乳配達の仕事をしている日本人の高松は、一緒にトラックにひかれそうになったことから偶然知り合います。貧しい境遇が似ているうえ、同じ小学六年生ということもあり、二人はすぐ仲よくなり、将来の夢を語り合います。新聞配達所で集金のお金が足りず、金永昌に盗みの疑いがかかった際に

は、高松がその嫌疑を晴らしに行つてやつたりもします。作品の最後は、帰国した金永昌から届いた手紙でしめくくられています。そこでは、いまの朝鮮は決して金持ちの国ではないが、一人の人間の悲しみや苦しみや幸せをみんなに分ち合おうという考え方に、将来の光明を求めています。こうした作品にも描かれているように、北朝鮮帰国事業は戦後の日本人にとって、同じ社会に住む在日朝鮮人の存在を、人間的な温かい目で見直す機会を与えてくれました。戦前以来、この人々が置かれた理不尽な立場を思い、それを少しでも償う意味で、帰国運動に協力する人が生まれました。

このときはまだ人道的な側面が強かったのですが、やがて在日朝鮮人に対する処遇の問題は、左翼的な社会運動や反体制運動の大きな課題となつていきます。在日朝鮮人の人権に関心をもつ組織がいくつもつくりられ、左翼政党や労働運動、さらに新左翼運動などで、在日朝鮮人問題が取り上げられるようになりました。一九六〇年代から現在まで、在日朝鮮人自身の運動とも連携したそうした取り組みは、徐々に社会に影響を与え、在日朝鮮人の法的地位や社会的処遇は、とくに一九八〇年前後から大きな改善をみます。

それは戦後日本にとって欠かすことのできない歩みであり、貴重な成果を生んできたわけですが、近年はその認識の枠組みから来る弊害、ないし視角の制約もまた目立つようになっていきます。つまり、政府批判や日本の反体制運動の一環として在日朝鮮人の問題にアプローチしてきたために、その視角から抜け落ちたり、その視角とは相對する問題には光が当てられない嫌いがあることです。

この北朝鮮帰国者の「その後」の問題は、タブー視される日本国籍取得の問題と同様、その典型です。現在、脱北のすえに日本に戻ってきた帰国者とその家族が百人あまりいると言われているのに、社会派の論客たちはこの問題の解決に冷淡です。脱北帰国者がうまく日本社会に適應できるようにするための日本語や社会生活の訓練、住まいや就職先の斡旋などは、志ある少数の団体や個人によって、多くの負担を背負いながら担われています。一九七〇年代以来の韓国民主化運動への連体運動では、いわゆる左派・進歩派があれだけ論陣を張り、在日韓国人政治犯の場合はその一人一人に一つないし複数の救援組織ができたのに、北朝鮮の人権問題はいわば右派の専売特許のような形になっています。

普遍的な人権問題として、朝鮮問題への取り組みにいま、従来の左右の対立構図を超えた、新しい枠組みが求められているのではないのでしょうか？ それを言葉にすれば、歴史を踏まえ、他民族への抑圧や偏見に警戒しつつも、同時に安易な善悪二分論やきれいごとで片づけられない粘り強い思考や、党派性を排除した態度と言えましょうか。韓国民主化運動に連帯したあの時代の熱気をも思い起こしつつ、本書の著者の思いを汲み取ってそれを形にすることが、喫緊の課題だと言えましょう。もちろんそれは、発想の転換をはじめ幾多の困難が伴いますが、それをしないでただ「北朝鮮バッシング」のみ批判しても、説得力や有効性をもちえた時代はもう過ぎ去っていると思います。授業でも、朝鮮問題を図式的に理解することは避け、「普遍性」と「双方向」をキーワードに、問題を多面的に考察していくよう促しています。

■解説者略歴

高柳俊男（たかやなぎ・としお）

一九五六年生まれ、法政大学国際文化学部教授、専攻は朝鮮近現代史・在日朝鮮人史。在日朝鮮人の歴史や文化に関連した論考として、たとえば以下がある。

- ・「映画『朝鮮の子』——民族教育の原点として」（新幹社『ほるもん文化』第五号、一九九五年）
 - ・「東京・枝川町の朝鮮人簡易住宅建設をめぐる一考察」（立教大学史学会『史苑』第五六巻第一号、一九九五年）
 - ・「『朝鮮文藝』にみる戦後在日朝鮮人文学の成立」（インパクト出版会『文学史を読みかえる』五、二〇〇二年）
 - ・「日本映画のなかの在日コリアン像」（藤原書店『環』第一号、二〇〇二年、特集「歴史のなかの『在日』」、のちに同社刊同名単行本に収録）
 - ・「在日文学と短歌——韓武夫を手がかりとして」（日本社会文学会『社会文学』第二六号、二〇〇七年、特集「在日」文学）」
- とくに帰国事業に関連したものは、次のような論文・資料集がある。
- ・（金英達との共編）『北朝鮮帰国事業関係資料集』（新幹社、一九九五年）
 - ・「映画『海を渡る友情』と北朝鮮帰国事業」（在日朝鮮人運動史研究会『在日朝鮮人史研究』第二九号、三〇号連載、一九九九年、二〇〇〇年）
 - ・「東京に朝鮮関連の史跡を訪ねる② 北朝鮮帰国事業をめぐる」（大阪国際理解教育研究センター『Sai』第二三三号、一九九九年）
 - ・「渡日初期の尹学準——密航・法政大学・帰国事業」（法政大学国際文化学部『異文化』論文編、第五号、二〇〇四年）

韓錫圭（ハン・ソクキュ）

ハン・ソクキュは、ペンネーム。

1930年代後半、関東で在日朝鮮人二世として生まれる。高校を卒業後、就職できず、帰国運動を展開している朝総聯傘下の在日朝鮮青年同盟に誘われて加入。六カ月間、朝鮮語と社会主義祖国に対する教育を受け、専任活動家として働いた後に帰国。

帰国後は、朝鮮中部の炭鉱都市に配置され、無煙炭運搬用のトラックの運転手として働いた。

2003年、日本から「帰国」した人々と日本人家族の実情を世界に知らせ、何らかの対策を立てて欲しいとの一心で、脱北を敢行。2004年に日本入国。

現在、何としても帰国の目的を果たすために、パソコン入力を習い、その前で奮闘している。

日本から「北」に
帰った人の物語

定価◎本体価格2000円＋税

2007年10月30日 第1刷発行

著者 © 韓 錫 圭
 発行人 高 二 三
 発行所 有限会社 新 幹 社
 〒112-0005 東京都文京区水道 2-1-12
 Tel 03-5689-4070 FAX 03-5689-2988
 郵便振替 00170-3-26306
 装丁/KARMS(崔起明)

本文印刷/協友社 装本印刷/富士見印刷 製本/協栄製本

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

Printed in Japan